

新書紹介

都市の中の川

ロイ・マン著 相田武文訳

鹿島出版会 B五版 二八三頁 四、八〇〇円

根岸線が開通する以前なのだからもう十数年前のことになるが、「桜木町から⑬系統の市電にのり(八幡橋)で下車せよ」と知人を案内したことがあった。どうか来宅した彼が「横浜には橋が多いんだね」と話したのを思い出す。

本町のオフィス街を抜けて、街中を走りながら「横浜橋」に始り「阪東橋」「陸橋」「中村橋」と続く停留所名を、騒音にかき消されやすい車掌の声から聞分けるのは「橋」と聞える都度緊張の連続だったそうである。大岡川に沿って⑥系統、吉田川と平行して⑩⑬系統、中村川に沿って⑧系統の市電が走っ

ていたのを思い起す市民も今ではわずかになってしまったことと思う。

本書を概観し、河川が都市の構造と発展の方向を規定し、また様々な都市開発が川と河岸地域を侵蝕するという実例に接し、かつての横浜都心部にめぐらされた川(その大半は先人の勞せし堀割である)と一体的に均質な交通便益を都心に提供していた市電のネットワークに本市の特徴的な都市構造が改めて見直され、また、高速道路を主体にした現実の都市の進行(大通り公園として生れ替る吉田川を唯一の例外として)を見る新たな視点を与えられる。

本書で著者は、「地球の管理に対する責任が常に人類にあると考えるならば」川と河岸地域に対して

(1)再生不可能な自然資源の浪費を中止または最小限に抑える(2)水、空気、景観の悪化を防止する、(3)更新可能な資源をリサイクルさせる、(4)人間の居住地、労働の場、都市のインフラストラクチャーをコンパクトなものとし、自然環境との調和をはかる

と四項目の目標を掲げ、これらを達成するために社会は、経済的、技術的、計画的、調整的によりよい手段を探し出すことを余儀なくされると述べている。そして、以上の目標手段をふまえた上で一五の河川に關係する都市地域を例に、環境的、地域的、歴史的観点から惹起された河岸問題とその解決のプロセスを評価し、残された課題をも含めて紹介している。

ヌのバリ地域では、水の流れと堤あるいは舟着場等の川の層、河岸通りや街路樹のある通りとこれに面した建物からなるアーバン・エッジ、そして建物の屋根、尖頭、ドーム等のスカイライン、と二層の八マイルに亘る視覚構造をとりあげ、このコリドーの保全のためには都市の内

部まで奥行をもった景観調整が必要であると説明し、また、田園地域では氾濫原、川、斜面、帯状の植物などが生態学的、景観的なコリドーをつくりあげ、居住地域では人々の自然との調和、また戦いの痕跡がコリドーの構成要素となつて、リヨンのシリベルジョナージュ島、ロンドンのリー川周辺などの例でそれぞれ、都市に住む人々とレクリエーション、生活との結びつけを説明している。

さらに本書の特色は豊富な写真と図版の使用により、著者のコリドーという空間認識を容易に理解できることである。この種の理論は著者の思想を具体的に裏づける写真、図版を使用することににより、一層意義が強化されるもので、過去には「アー

バン・デザイン」(ポール・D・スプライゲン著)「都市のデザイン」(E・ペーコン著)というすぐれた著書がある。

本市の都市づくりは、湾岸道路、ベイブリッジをはじめ、新港埠頭、三菱ドック移転跡地の再開発、貨物ヤード等、都心臨海部に多くのプロジェクトが課題として集中している。「川は都市地域に最後に残された谷であり、人々がふたたび利用し、楽しみの権利をとり戻すことのできる最後の道である」という著者の言葉を「臨海部」と置替えることもできよう。

都市再開発の分野で、広場論が盛んである。水を主要な要素とし、人々がたわむれ、遊ぶ姿もよく例として紹介される。

タイトルから期待した、都市に生活する人々と水とのかわり合いに関して、本書では必ずしも満足を得られないが、水際の再開発にあたっては、一貫して水際線を市民の広場としてとり戻してゆこうとする根拠のいる仕事、続けられなければならない。

〈都市開発局主査 武宮秀教〉